

# 1 横浜開港当時の水事情

横浜には大きな川がありません。さらに、海や沼地を埋め立てている土地のため、井戸を掘ってもほとんどの水は塩分を含み、飲み水には適しませんでした。良い水が出る井戸は、当時2つしかなかったといわれています。多くの方は行列必至の井戸を頼るか、それが嫌なら郊外の湧き水をくんで売り歩く「水売り」に頼るほかありませんでした。住民は、天秤棒に一斗樽(約18ℓ)を2つ下げた水売りから、一升(約1.8ℓ)あたり1銭で水を買います。米1升1銭5厘の時代にとっても高価でしたが、それでも飛ぶように売れました。

横浜の地質では良質な水が得られなかったため、水不足、疫病の流行、大火事の発生などの問題に悩まされていました。人口の増加と共に、飲料水の問題はますます深刻になり、日本人側からも外国人側からも、水道建設の提案がされるようになりました。

『横浜水道創設百周年記念写真集』より「水売り」

横浜市水道局編

1988年 <K51.1/63/a 貸出不可>

